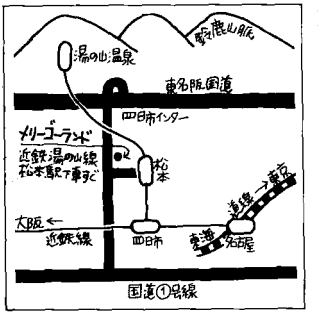
子どもの本屋、全力投球！

増田喜昭

就職しないで生きるには ⑨

晶文社

著者について
増田喜昭（ますだ・よしあき）
一九五〇年、三重県生まれ。京都外国語大学英米語学科卒業。三年間、名古屋の商社に勤めたのち、七六年に、子どもの本専門店「メリーゴーランド」を開く。
住所―三重県四日市市松本町三の九の六
ときわ文化センター一階
電話―〇五九三（五一）八二二六



〈就職しないで生きるには〉❶
子どもの本屋、全力投球！
一九八三年一一月二五日初　版
一九九九年　一　月一〇日一一刷
著者　増田喜昭
発行者　株式会社晶文社
東京都千代田区外神田二―一―一一
電話東京三二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）
振替〇〇一六〇―八―六二七九九
中央精版印刷・美行製本
© 1983, Yoshiaki Masuda
Printed in Japan
Ⓡ本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（〇三―三四〇一―二三八二）までご連絡ください。
〈検印廃止〉　落丁・乱丁本はお取替えいたします。

就職しないで生きるには❾

子どもの本屋、全力投球!

増田喜昭

晶文社

ブックデザイン　平野甲賀

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

子どもの本屋、全力投球！　目次

おじいさんへの手紙　9
1　メリーゴーランド号の出航　14
2　本屋？　それとも図書室？　28
3　新しい仲間が集まってきた　38
4　選ぶ・読む・売る　52
5　たった二年でつぶしてたまるか　61
6　子どもは本を待っている
学校へ本を売りにいく　78
絵本のメニュー!?　87
課題図書ってなんだい　92

7 五年目の思わぬプレゼント 105

8 小さな本屋の大きな夢

自分たちで本をつくりたい 119

はじめて書いたラジオドラマ 128

作家の講演をきく 134

サマーカレッジは大成功 139

絵本フェスティバルの貴重な体験 143

がんばろう、全国の子どもの本屋さん 145

9 「ひげのメリーさん」書店日記 149

あとがき 178

おじいさんへの手紙

おじいさん、お元気ですか。……といっても、おじいさんはぼくが子どもの頃に死んでしまったんでしたね。ぼくは、最近よく、おじいさんのことを思い出します。

ぼくはいま、ぼくが生れて育った四日市のこの町で、小さな本屋をしています。本屋といっても、絵本や童話ばかりをあつかっている「子どもの本専門店」です。

そうです。単なる思いつきで始めたんです。何をやっても三日坊主だったぼくなのに、なんと七年も続いています。「あたりまえじゃ」と、しかられそうだけど、この「子ども

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の本専門店」というのが、なかなか商売にならないんです。説明すれば長くなるんですが、いわゆる理想と現実のくいちがいってやつで、いつも、あのすごろくでよくある、「ふりだしにもどる」ってところで止ってしまうんです。それでも、ぼくの志を支えてくれる人たちがたくさんいて、ほんとうに気持ちよく応援してくれるのです。そんな人たちに出会うたびに、ぼくは喜んでふりだしにもどってがんばっているのです。

そして、なぜかいま、大工の仕事一筋だったおじいさんのことをよく思い出します。

ぼくは小さい頃、おやじが入院していたこともあって、どちらかというと、おじいちゃん子だった。

でも、ぼくは、やさしいおじいさんを思い出すよりも、大工仕事をしているおじいさんの姿しか思い出せません。はちまきをしたおじいさんが、トントンカンカン、シュッシュッと仕事をしているそばで、木の切れはしをおもちゃにしてあそび、疲れたら、かんなくずの山にうもれてねむっていたぼくにとって、おじいさんの働く姿と、その音は忘れられません。

夜、家族のみんなが茶の間にいるときでも、おじいさんはひとりで、ギーコギーコと、のこぎりの目立てをしていましたね。あのとき、正直いって、うるさいあの音がきらいでした。

小学生の頃、夏休みの工作の宿題で船を作るのに、おじいさんののこぎりを持ちだして、刃をだめにしてしまい、ひどくしかられたことがありましたね。あのとき、ぼくは、たくさんあるんだからひとつぐらい貸してくれてもいいと思っていたので、どうしてあんなに怒るのかよくわからず、ただくやしくって泣いていたんです。でも、次の日、古いのこぎりをぼくに貸してくれて、使い方を教えてくれました。船の先の部分を斜めに切ることができなくて困っていると、切りやすいように切り目を入れてくれました。そうするうちに、ぼくは自分でのこぎりが使えるようになり、おじいさんが毎晩のように目立てをしていたのこぎりがいかに大切なものであるかが、だんだんわかってきました。

あの日以来、ぼくはおじいさんの仕事をじっと見るのが好きになったみたいで、魔法のように木を切ったりけずったりしているのを見ると、自分のおじいさんであることがうれしくなったりしたものでした。

ぼくがなぜ、いまおじいさんのことを思い出すのか、よくわかりませんが、たぶん、ひとつの仕事に打ち込み、そこに自分をさらけ出しながら、ていねいに仕事をしてゆく、頑固な職人気質のようなものを、いまなら理解できると思うからでしょう。

子どもの本を読んで売る。気に入ったものはがんばって売り、気に入らないものはいく

ら売れているものでも置かない、といった頑固なやり方を七年続けてきました。そして、その七年間に出会ったさまざまな本や人に影響されながら、この仕事は、単に子どものためとか地域の文化のためとかいったものではなく、何よりも自分自身のためであることに気づいてきました。

おじいさんや、おじいさんのお弟子さんが建てた家は、あの独特の入母屋を見れば、素人のぼくでもひと目でわかるように、ぼくの好きな作家や画家の作品のなかにも、その入母屋が感じられるのです。それは、単に個性といってかたづけられるものではなく、その人の生活や人生が伝わってくるのです。

いまの世の中は、忙しすぎます。おじいさんがしていたように、ゆっくり木を乾かしたり、十年計画で家を建ててゆく大工さんもいなくなりました。道具はずいぶん便利になったかも知れません。専門的なことはよくわかりませんが、ひとつのことに時間をかけることが、不経済な時代なのです。

店によく遊びに来る子どもたちのなかにも、よく腕時計をしている子をみかけます。ぼくをふくめ、みんな時間に追われた生活をしています。

それだからこそ、ぼくは、そんな忙しいなかでこそ、自分の知るかぎりの本の世界を店に来てくれた子どもたちと共有したいのです。にわかづくりの、子どもだましの、いいか

げんな本は売りたくないのです。

いつだったか、ぼくがおやじと二人で、せっせと勉強部屋を作ろうとして、まがりくねった松の木の梁(はり)に、ベニヤ板の色のついたやつを、かぶせていたら、もう腰のまがっていたおじいさんが、怒って全部はいでしまったことがありましたね。

いま、あのときのおじいさんの気持ちがよくわかります。きっとおじいさんにとって、ベニヤ板は木ではなかったのでしょうね。

ぼくが大切にしているアルバムのなかに、褌(ふんどし)一つで、風呂上りの牛乳を飲んでいるおじいさんの写真があります。お酒が飲めなかったおじいさんの休息のひとときだったんですね。

おじいさんが、若い頃、大工の修業を何年もしたように、ぼくも、子どもの本の世界の専門家になるべく、いま一度ふりだしにもどって、七年間に出会ってきたさまざまな人や本について思い出しながら、次の一歩を踏み出してみようと思うのです。

1　メリーゴーランド号の出航

「悪いことといわないから、やめたほうがいいですよ」
ぼくが初めて名古屋の子どもの本専門店メルヘンハウスを訪ねたとき、店主の三輪さんは言った。
なるほど、三輪さんに言われるまでもなく、本を選んで売る、しかも子どもの本だけとなるともうからないのはあたりまえかも知れない。三年も前からやってる人から、「もうからないからよしたほうがいいよ」と言われると、すごく説得力があった。

しかし、いかに大変な仕事かを説明されても、ぼくの目は店に出入りする子どもたちやお母さんにくぎづけになっていた。もう自分がそこに立って、お客さんと楽しい本の話なんかしながら、レジを打っている姿を夢見ていたのである。まったく先天性の楽天家なのだからどうしようもない。自分にはこの仕事しかないと決めてしまったのである。

大学を出て名古屋の貿易会社にいた三年間には、丸善が近くにあったので、ひまさえあれば通って本を眺めていた。ときどき、絵本の原画展や世界の絵本展をやっていて、外国の絵本をたくさん展示したり販売したりしていた。「なんでこんな絵本は普通の本屋さんに置いてないんやろ」と思いはじめたのはこの頃だ。

ちょうど新聞に、名古屋の本山（もとやま）に「子どもの本専門の店」が開店した、という記事が載った。ぼくはまだ子どもの本屋をやろうなどと考えていたわけでなく、一度行ってみたいなあと思って、その新聞の切り抜きをずーっと定期入れに入れていた。

ぼくが会社につとめて三年目に、親父が「文化センターを建てるぞ」と言いだした。もともと百姓だった親父は、自分でガソリンスタンドを八年間ばかりやっていたが、体が続かんからと、そこをひとにゆずって、その資金をもとに、三階だてのビルを建てることにしたのである。名前は「ときわ文化センター」。名前のとおり、いろんな文化教室を始めることになった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com